

Longitudinal changes in depressive symptoms associated with social isolation after the Great East Japan Earthquake in Iwate Prefecture: findings from the TMM CommCohort study

岩手県における東日本大震災後の社会的孤立に関連する抑うつ症状の縦断的变化：TMM CommCohort 研究からの知見

【背景】

大規模地震などの自然災害は、被災地における住民の生活環境を一変させ、社会的に孤立しやすい状況が生じやすくなります。社会的孤立とは、社会の中で他人との交流が少なく孤立している状態をいい、抑うつ症状が起こりやすくなることがいくつかの研究で報告されています。しかしながら、震災による家屋被害や家族の死などの被災状況が、その後の社会的孤立と抑うつ症状との関連にどのような影響を及ぼすかは、ほとんど明らかになっていませんでした。

そこで、私たちは、東日本大震災・大津波（以下、東日本大震災）による被災経験が社会的孤立の変化と抑うつ症状の関連に及ぼす影響について検討しました。

【方法】

今回の研究では、IMMが岩手県において実施した地域住民コホート調査に参加いただいた方のうち、1回目の調査（ベースライン調査、2013年度～2015年度）および2回目の調査（詳細二次調査、2017年度～2019年度）の両方に参加し、社会的孤立に関する質問と抑うつ状態に関する質問に回答した10,314人の経時的データを用いて解析を行いました。

【結果】

新たに社会的孤立状態が認められた方は、社会的孤立状態にない方に比べて、抑うつ症状のある方の割合が有意に高いことがわかりました。また、社会的孤立状態が継続している方のうち東日本大震災による家屋被害を経験した人、および、新たに社会的孤立状態が認められた方のうち東日本大震災による家族の死を経験していない人で抑うつ症状のある方の割合が有意に高いことを明らかにしました。

【今後の展望】

新たに社会的孤立が認められたり、社会的孤立が継続している方では、震災による家屋被害や家族の死を経験した人のみならず、家屋被害や家族の死を経験していない方においても、抑うつ症状のリスクが高いことを示しました。家屋被害や家族の死といった経験をしなかった方においても、大規模自然災害のような生命を脅かす出来事を経験した住民の長期的な健康状態を把握することは重要であると考えられます。